



まあちゃんの笑顔

あさの あつこ

真由菜は、走っていた。必死に走っていた。

わたし、なんで、こんなに走っているんだろう。

なぜ？どうして、止まらないの。助けて、だれか助けて。

叫ぼうとして口を開けたとき、足の下にぽかりと穴があいた。

落ちていく。穴の底へとまっ逆さまに落ちていく。

目が覚めた。白い天井が見える。青いチェックのカーテンも見え

る。まちがいなく、真由菜の部屋だ。時刻は、もうすぐ午前七時になるところだった。いつもの起床時間より三十分も早い。だけど、もう一度、ふとんにもぐりこむ気にはなれなかった。

ため息をついていた。ため息をつくとき涙がこぼれそうだった。

ひどいことをしちゃった。花歩ちゃんにひどいことしちゃった。

昨日の放課後、真由菜は、花歩ちゃんのくつ箱に手紙を入れた。

それは、とてもいじわるな手紙で、中には「死ね」とか「バカバカ、バイキン女」とか「学校にくるな」といった、汚い言葉が書きつらねてある。そんな手紙を花歩ちゃんのくつ箱に入れたのだ。

「真由ちゃん、入れてきてよ」

光子ちゃんに言われた。手紙を書くように言ったのも光子ちゃんだ。

破いたノートに、光子ちゃんや久美恵ちゃん綾美ちゃんたちがいろいろないじわるな言葉を赤鉛筆や黒のボールペンを使って書いた。その後、光子ちゃんが真由菜の前に、ノートを差し出したのだ。ノートは、お葬式の写真みたいに黒くふちどられていた。ぞつとした。

「真由菜ちゃんも、何か書いてよ」

「え……でも、わたし……」

「花歩ちゃん、むかつくでしょ。ちよつとだけこらしめてやろうよ」

光子ちゃんは、真由菜に向かって片目をつぶってみせた。光子ちゃんのことは嫌いではない。はきはきしていて、頭もよくて、親切なところもある。去年も同じクラスだったけれど、体育の時間、転んでケガをした真由菜を保健室まで連れて行ってくれた。その日の下校のとき、家の近くまで真由菜の荷物を持って送ってくれた。優しいのだ。でも、気が強くて、誰かに負けることがまんできない。

この秋、市が主催する「小、中学校秋の展覧会」に学校の代表

花歩ちゃんは手紙を読んでもすぐ、顔をゆがめた。くしゃり。そんな音が聞こえそうなほど、強くゆがめた。涙がもりあがり、コンクリートの床にぽつん、ぽつんと落ちていく。とても辛そうな顔だった。目にやきついている。

真由菜はベッドから出て、窓のカーテンをあけた。鳥の音が聞こえる。空は青く、うすい雲がベールのように広がっている。そのうす雲をつらぬいて、朝の光がきらきらと地上にふりそそいでいた。とてもきれいな秋の朝だけれど。真由菜の心は重い。重すぎて、うまく息ができないほどだ。花歩ちゃんの顔を見るのが苦しかった。

どうしよう……。

そのとき、ふつと思いついた。あの絵、花歩ちゃんが誕生日のプレゼントにくれた絵。あれ、どうしただろう。急にあの絵が見たくなった。どうしても、見たい。

机の一番下の引き出しをあける。『たからもののはこ』と、ひらがなで上書きしてある白い箱があった。写真とかビーズのアクセサリーとか、人形とか、昔大事にしていた『たからもの』が、二杯入っている。

「あった」

赤いリボンでくくられた画用紙があった。真由菜の顔だ。画用紙いっぱいの笑い顔。小さなころの真由菜が笑っている。耳の下で切りそろえた髪型の真由菜、すごく楽しそうに笑っている真由菜。前歯が二本、ぬけている真由菜。後ろにはいろんな花が咲き乱れている。色だけじゃなくて、花の形もちがっていた。絵の中から、笑い声がこぼれてきそうだった。花の香りがただよってきそうだった。

わたし、こんなにすてきな顔で笑っていたんだ。こんなに明るくて、楽しそうに笑っていたんだ。

まあちゃん。花歩ちゃんの声が聞こえた。

として、光子ちゃんと花歩ちゃんの絵が出品された。そして花歩ちゃんの絵は、みごと最高の「市長賞」に選ばれたのに、光子ちゃんの作品は佳作にもならなかった。朝礼のとき、全校生徒の前で校長先生は、花歩ちゃんのことだけをほめた。だから、光子ちゃんは花歩ちゃんにむかっているのだ。花歩ちゃんみたいな、勉強でも運動でも、そんなに目立たないような子に負けて、悔しいのだ。

でも、でも、それって……花歩ちゃんのせいじゃないよ。

そう言いたかった。花歩ちゃんとは、幼稚園のときから友達だ。花歩ちゃんは静かで優しく、幼稚園のときから絵が上手だった。

「まあちゃんにプレゼント」

一年生のとき、花歩ちゃんは真由菜の顔を画用紙いっぱいに描いて、誕生日に渡してくれた。十二色のクレヨンで丁寧に描いている。後ろには色とりどりの花が咲いていた。とてもきれいな絵だった。

花歩ちゃんは、今でもたいせつな友達だ。いじわるな手紙なんて書きたくない。だけど……。

光子ちゃんの顔をちらりと見上げる。書きたくないって言ったら、次は、わたしがいじめられるかもしれない。それは……嫌だ。

「真由菜ちゃん、早く」

光子ちゃんの声が少しとがってくる。

「だけど……何て書いたらいいか、わからないし……」

「死んじゃって書けば。その下にドクロも描いてよ」

真由菜は言われたとおりにした。

死んじゃえ。そしてドクロの絵。

それを花歩ちゃんのくつ箱に入れた。入れた後、光子ちゃんたちといっしょにかけに隠れて、花歩ちゃんのようなすを見ていた。



まあちゃん的笑った顔、描いたんだよ。わたしが一番好きなまあちゃんの顔、描いたの。プレゼントになるかな？

花歩ちゃんは、ちよつと恥ずかしそうにこの絵を渡してくれた。

花歩ちゃん……。

その朝、真由菜は四つ角のところに立っていた。ここで待っていれば、花歩ちゃんを通る。花歩ちゃんに会って、謝ろう。

「花歩ちゃん、昨日の手紙、わたしが書いたの」正直にそう言おう。それから深く頭を下げよう。「ごめんなさい」って謝ろう。謝ったら、花歩ちゃんは許してくれるだろうか。もしかしたら、怒るかもしれない。「ひどいよ、あんな手紙、書くなんてひどいよ」と、真由菜のことを怒るかもしれない。口をきいてくれなくなるかもしれない。

真由菜は両手を強くにぎりしめた。

でも、謝らなくちゃならない。このまま黙っていたら、二度とすてきに笑えなくなる。謝らなくちゃ、どうしても謝らなくちゃ。

花歩ちゃんの姿が見えた。少しうつむいてゆつくりと歩いてくる。

「花歩ちゃん」

名前を呼んで、真由菜は一步、花歩ちゃんに近づいた。



撮影：長岡博史



丹地 陽子／絵

あさの あつこ
作家。岡山県生まれ。「バッテリー」で野間児童文芸賞、「バッテリー2」で日本児童文学者協会賞受賞。近著「チウガクセイのキモチ」「ぬはたま」ほか著書多数。